第５章　高橋和巳と『邪宗門』④

元おやさと研究所長
井上　昭夫　*Akio Inoue*

第四節　宗教的ユートピアとディストピア

吉本隆明著『共同幻想論』の「禁制（Tabu）のようなもともと未開の心性に起源をもった概念に、まともな解析をくわえた最初のひとはフロイトであった。フロイトに類推の手がかりをあたえたのは神経症患者の臨床像である」（50 頁）にはじまる「禁制論」のなかで引用されている柳田国男の『遠野物語』の聞き書きの一節は次のような物語である。吉本は「柳田国男が山人畏怖を高所崇拝とをむすびつけ、村人と山人とのあいだを、現世と他界とになぞらえ、土着民と外来民との関係に対比させたのは、かれの学的な体系がはっきりした骨格をもつようになったからである」と述べたのち、〈入眠幻覚〉の恐怖と〈出離〉の心の体験というものをひきだして、〈恐怖の共同性〉の象徴的解釈をおこなっている。次はそのもととなる『遠野物語』の一節である。

> 遠野のある長者の娘が、雲かくれして数年もたった後、おなじ村の漁師が山の奥で、その娘にあった。おどろいて、どうしてこんな処にいるのかと問うと、或る者にさらわれていまはその妻になっている。子供たくさん生んだけれど、夫がたべてしまってじぶん一人である。じぶんはここで一生涯を送るけれど、ひとにはいわないでくれ、おまえも危ないからはやく帰った方がいいといった。

このように引用された遠野物語の数々から独創的解釈をひきだしてくる吉本の「禁制論」に目をとおすならば、中上健次が1968 年に出版された吉本の「『共同幻想論』一冊で文学は息の根を止められた」と、その〈解説〉・「性としての国家」において評価していることと、その３年前に上梓された高橋和巳の『邪宗門』（1965 年）には相互関係性があると思われる。

『共同幻想論』とは、いままで文学理論、政治思想、経済学、宗教、芸術などのすべての範疇は異なった分野の問題としてばらばらに表現されてきたが、吉本にはすべて基本的には統一的に全幻想領域として見えるようになってきたという（266 ～ 274 頁）。この書の視点は、幻想領域にある表現論の追求から彼がたどりついた全幻想領域の構造を、共同幻想（国家、宗教、法）、対幻想（家族、性関係などペアになっている幻想）、自己幻想（芸術理論、文学理論、文学分野）の三つの軸で区切ることからはじまる。つまり、この三つの軸の内部構造と、表現された構造との相互関係を解明していけば、すべての幻想領域の問題は解明できるはずだとする。高橋和巳の小説『邪宗門』の背景には、吉本の『共同幻想』の三つの軸の内部構造と相互関係が象徴的に表現されているのが読み取れるであろう。たとえば、その意味は新たに執筆された「角川文庫版のための序」を読めば理解しやすいので、その項を引用しておきたい。

> この本の主題は国家が成立する以前のことをとり扱っているから、もともとは民俗学とか文化人類学とかが対象にする領域になっている。だが民俗学とか人類学とかが普通扱っているような主題の扱い方をとろうとはおもわなかった。また別の視方からは国家以前の国家のことを対象にしているから、国家学説の問題なのだが、そういうとり扱い方もとらなかった。また編成された宗教や道徳以前の土俗的な宗教や倫理学のように主題をとり扱おうともかんがえなかった。ただ個人の幻想とは異なった次元に想定される共同の幻想のさまざまな形態としてだけ、対象をとりあげようとおもったのである。

一方高橋は「人間は自分の知り得ぬ事柄にたいして、原則的に責任をとる必要はない。……しかし知ったことに対する無責任は、悪ですらなく、ほかでもない人間の物化を意味する」と「文学の責任」（『対話』第２号、1957 年）で語っている。

> 『邪宗門』は、高橋和巳が人間にとって宗教とはなにか、真の救済、幸福とはなにかを問う。つまり宗教論としてあるべき理想郷・ユートピアと、現実の国家体制との歴史的・政治的軋轢と葛藤のかたちを、現実に存在した新宗教団体をモデルにして展開し、疑問を突きつける思想的小説でもある。問われた宗教救済思想や教団組織、そしてその目的実践における宗教と国家の関係性などなど、モデルとなったと推測される大本教や天理教をふくむすべての新興諸宗教、すべての既成宗教に、個人的にも共同体としても通底する重大な信仰に関する教えを「極限化」すればどのように成るかを決定的な問題として提起している。

『邪宗門』第三部第三章「七哀詞」には、満州開拓団ひのもと村民の敗戦直後の悲惨な敗走と全滅が語られているが、ここでは「ユートピア試作・満州天理村」（拙著『ユートエコトピア』（日本地域社会研究所、276 ～ 285 頁参照）の歴史がかさなる。天理教の満州天理村は、東京大学建築学部と共同して「人類救済」の理想を掲げた建築史にのこる有名な宗教的ユートピア作品であった。高橋は日本の現存の宗教団体２～３を遍歴し、その教団史を検討し、そこから若干のヒントをえたと『邪宗門』の「あとがき」で述べているが、ひのもと村民の昭和 11 年以来、９年にわたる満州開墾地からの、むしろ敗戦後の決別の悲劇は地獄図そのものであった。ほかにも地獄図を描写するのに「泥海」の象徴的比喩が再三出てくるが、一皮めくればそれはかけがえのないユートピアであり、カタストロフィの情景は高橋にとっては両価的存在に映っているにちがいないという意味のことを遠丸立は『高橋和巳論』（埴谷雄高編、「ユートピアの展望―『邪宗門』論」）において語っている。その描写は、第三部第三章「七哀詞」のソ連軍に追われる開拓団が幼児と乳飲児をもつ女や鶏を車に乗せ、開墾地を脱する一行が密林に達し、支援を懇願した日本軍からも無視される。次の文章が（『邪宗門』398 ～ 399 頁）象徴的である。

> 恐怖におののく生存者を集め、車座になって遠藤村長は語った。
> 「すがるものは今はただ神のみ。声を合わせて開祖のお筆先を誦しましょう」
> いまは獣類の世、牙の世、強いものの価値の悪魔の世。
> 神の光を悪魔が覆うて、まことの人の胸に血が流れるぞな。
> 働き人は疲れ、女は泣き子は飢える。如何がすればよろしきや……

この世を立直せ、神の怒りが下りる。くいあらためよ、皆の衆。これが神のお告げだとまだお筆先第一番を誦し終わらぬうちに、遠藤村長は胸をかきむしり、逃避行第１日目にして開拓団員を失った責任の重さに耐えられず、劇薬を飲んで自殺する克明な描写。これはある種のユートピアを目的に正義化された国家共同幻想による戦争が、結局は宗教幻想の極致によるディストピアを生み、両者によるディストピアの体験があらたなユートピアを再生させる可能性が宗教組織にあるのかという逆説のエンドレスな循環を象徴した結論であるとみられる。つまり、信仰や宗教とは、個の救済か全体の救済か、あの世の極楽か、この世の極楽かが問題なのである。自殺は両者にとって、問題の解決ではなく、少なくとも問題の解消であり、自死はあくまでも人間の生の問題として扱われなければならない。